中村幸彦著述集

第十卷

©一九八三

中村幸彦著述集　第十巻
定価六五〇〇円
昭和五十八年八月十五日印刷
昭和五十八年八月二十五日発行
著者　中村幸彦
発行者　高梨茂
印刷者　青木勇
発行所　中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二―八―七
振替東京二―三四
検印廃止

中村幸彦著述集　第十巻　舌耕文学談

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

一　序章　九

二　実録、講談について　一九

1　実録体小説研究の提唱（一九）
2　実録研究綱領（三二）
3　実録と演劇―伊達騒動物を主として（五五）
4　柳沢騒動実録の転化（七六）
5　実録黒田騒動の成立（八九）
6　水戸黄門記をめぐって（一二三）
7　太平記の講釈師たち（一二九）
8　神道系講談―吉田天山の『北野実伝記』を軸として（一三七）
付　吉田天山と北野実伝記の再説（一四五）

三　落語について　一四八

1　仕形咄考（一四八）
2　古典落語の研究法（一六二）
3　古典落語―その文学的面白さの発見（一八二）
4　落語の文芸性（一八七）

四　舌耕文芸資料断片　一九九

1　京都桂派（一九九）
2　大阪の噺会（二〇五）
3　明治初年のうかれ節興行（二二）
4　不風流志道軒伝（二三〇）

5 大阪講談中興之祖 吉田一保（二三二）
6 軍談業名面帳（二三九）
7 高古堂と小咄（二四七）
8 舌耕文芸家春水（二五一）
9 上方の講釈（二五五）
10 茶番（二五九）
11 大阪俄（二六四）
12 金鳳堂本虎の略伝（二六八）

五 浪花節について　二七二
1 ちょんがれ、ちょぼくれ考（二七二）
2 浪花節（二八八）
3 伝統芸能における浪曲の位置（三〇八）

六 大阪俄について　三二四
1 大阪俄の発生（三二四）
2 ぼけの味（三三七）

付録　三五五
1 菅家瑞応録について（三五五）
2 白太夫考―天神縁起外伝（三七七）
3 江戸時代上方における童話本（三九七）
付 上方童話絵本二、三（四三三）

後記　四三九
書誌　四四三

〈挿画〉
本読素人講釈　一五　全書仙台萩　六二　日光かんたんの枕　七九

箱崎釜波故　九二
北野実伝記　二三九
私可多咄　二五二
のちの落語集　二〇〇
興行御願　二二四
鑑札写　二二五
志道軒伝　二二一
狐講釈　二四九
軒並娘八丈　二五一
口上茶番早合点　二六三
本虎追福くさの露　二六九
ちょんがれ、ちょぼくれ　二九〇
八百屋お七　二九四
小割屋伝内身上噺　二九四
願書　三〇〇、三〇一
清神秘録　三一五
古今俄選　三一八、三一九
雲水閑雑纂　三二四
風俗図説　三三五
風流俄天狗　三三九
瑞応録　三五八
ねずみのよめ入　四〇〇
大福徳寿楽歳玉　四〇四
増補絵空事　四〇九
通話八卦　四一二
茶薄山暮気遊来　四一六
風俗雀実記　四二一
伊賀栗乗掛語噺　四二四
画本大津の御馬　四二六
狸入道盛衰夜話　四三五

舌耕文学談

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

箱崎釜波故　九二
北野実伝記　一三九
私可多咄　一五一
のちの落語集　二〇〇
興行御願　二一四
鑑札写　二一五
志道軒伝　二二一
狐講釈　二四九
軒並娘八丈　二五一
口上茶番早合点　二六三
本虎追福くさの露　二六九
ちょんがれ、ちょぼくれ　二九〇
八百屋お七　二九四
小割屋伝内身上噺　二九四
願書　三〇〇、三〇一
清神秘録　三一五
古今俄選　三一八、三一九
雲水閑雑纂　三二四
風俗図説　三三五
風流俄天狗　三三九
瑞応録　三五八
ねずみのよめ入　四〇〇
大福徳寿楽歳玉　四〇四
増補絵空事　四〇九
通話八卦　四一二
茶薄山暮気遊来　四一六
風俗雀実記　四二一
伊賀栗乗掛語噺　四二四
画本大津の御馬　四二六
狸入道盛衰夜話　四三五

ものが、色々と入っているので、その種のものと区別すべく、別称を使用する。如何なるものを含むかとなれば、早く発達して今日にも伝わっているものでいえば、講談、落語の持っている文学の部分を指すのである。それならば寄席文学、寄席文芸と称してはいかがとの説も出るであろう。しかし私は、歴史的に見渡して、同じ類の神道講釈や、諸宗派の説教（又は説法）なども、中世から近世にかけて、娯楽化、大まかな言い方をすれば、文学化して、専門家が出現、大いに大衆をよろこばせたもので、これらをも是非加えたいのである。文学史上でも、芸能史上でも余り対象とならない神道講釈や説教の流行を証する例はいくらでもある。後に若干は紹介しよう。近頃は新しく「話芸」と称するよい言葉が使われるようになった。「話芸文学」でも支障がないが、若干出典のある語を使用したのが、舌耕文学である。江戸時代の、かかるものに関しての意識を示す一例を、参考にまで掲げて見る。逢坂山の関清水大明神（現大津市関蟬丸神社）は、近世では諸芸団を取締る社として、免許状の発行などしているが、その神社の「御由緒配下」の諸芸を次のように分類している。

説　教（人形操師、歌舞伎物間似狂言尽、芸伎者、十三香具師、浮世咄師、通俗講釈師）

讃　語（琵琶法師並瞽女、歌念仏、歌謡、浄瑠璃語り師）

勧進師（辻能狂言師、辻角力、長吏方並木戸方、小見世物、合薬旅売）

音曲道（放歌師、祭文師、白拍子、傀儡遊女、三味線方）

これで見ても、浮世咄師とは落語家と見てよく、通俗講釈師は勿論、講談師、共に説経の分類に入っている。この舌耕文学の中へは、前出の分類では、讃語に入る、琵琶法師並瞽女、浄瑠璃語り師、音曲道に入る祭文師、この中へはこの分類以後に発達する浪花節語りも入るであろうが、この類を含めないことにしようと思う。それらは今日ではまた「音芸」という便利な語が出来ていて、楽器を伴奏にすることを立前とする芸である。よって、

この類は文章にもリズムがあり、会話文が入った場合も、その文章は、どちらかといえば演劇的である。現に浄瑠璃は演劇を伴い、私達の子供時には、田舎では浪花節芝居なるものを、しばしば見た経験がある。琵琶や歌念仏は韻文といってよいかも知れない。現に音芸の多くはそれを発表することを「語る」と呼び、説経や神道講釈は「談じる」、講談は「読む」、落語は「話す」と称して、区別されて来ている。共に芸能の一種であるが、文学の面からいえば、散文の系統にあるものを、舌耕文学の中心に置くべきだと考えている。

○

中国でも、これに類した話芸が存して、今日にも伝わっている。唐の昔から説経僧があった。宋代からは説書人と呼ぶ一種の講釈師が出現して、『三国志演義』や『忠義水滸伝』などの大作も、その芸から発して出来上ったという。裁判小説の如き短いものもある。戦前、満州や中国へ旅行した人の話では、人出の多い所に辻立して、大きいジェスチャー入りで、語るが如く話すが如く行われていた。その人の感想では、日本の講談の如く練れた芸とは思われなかったとのことであった。今日では、平凡社の東洋文庫に『中国講談選』の編訳が出版されたり、テレビでも時々放映して、見ることが出来る。私は何十年も前の学生の頃、折から西欧の諸芸能を調査して帰られた坪内士行氏の講演を聞いたことがある。その時、日本の講談、落語の類は、西欧の諸芸能にこれと類似のものを求めても存在しない、我が国独特の芸ではなかろうかとの一条のあったことを記憶している。しかし私は日本の芸を誇ったり、その芸なるものに随喜渇仰するものではないことは申上げておく。ここに採り上げた話芸や、参考に引いた音芸の類は、日本の中世、近世の封建社会で発達し、完成したものである。一芸のみに専念出来る、又しなければならなかった、いわゆる封建的環境の中で、そのすぐれたものは名人芸的に練られて、技術の向上を来たし、徒弟制度的な修錬によって伝えられて来たものである。そして封建社会の具体的な面、娯楽とか儀礼

とかと緊密に結びついて、それから脱出できない性質のものであった。近代の芸術や文学が高級になるにつれて、生活の具体面から離れ実用性を失って行くのとは相違している。封建社会の良い面も悪い面をも持っているのである。今一つ例を引けば、花柳界の気風やその風習などと、共通のものを持っている。しかし近代に入って、講談や落語が、近世以来のまま、古典的な芸を守るのがよいとするものではない。古典落語一辺倒などを私は好まない。謡曲や浄瑠璃の如く、新作が全くといってよく絶えた古典的芸能に、話芸や音芸はなって欲しくない。伝統を受継ぎながら、どしどしと新しい特色を付加える努力が必要であり、それこそ「生けるしるし」である。近世の完成は、中世よりのものを受けて、近世化したものであった如く、近代の話芸の振起を希望している。私がここで発言するのは、少くとも近世の話芸はそれとして、芸能としても、舌耕文学としても、只に趣味的な対応、興味に止まらず、学問の対象として、研究を進めなければならないことを、強調するためである。

○

音芸や話芸の類をも含めて、この種のものを「芸能」と総称する。芸能とは何ぞやと先人の説に聞いて見ると、いずれも皆、人間の肉体又はその一部を動かす芸術であると答えてくれる。舞踊は身体全部、音芸は手又は手足で楽器を奏し調子をとり、音声を発して歌唱する。話芸は舌頭をもって発表するなどがこれにあたる。解答の第二は、その内容をなすものを、書画や文学に準じて作品と称して見れば、書画や文学作品の如く、発表すればその一回切りで発表は終了するものでなく、繰返し繰返し演ずる度毎に鑑賞されるのが芸能であると答えてくれる。話芸の作品（「ネタ」などと称される）は「ネタ」そのものを鑑賞するのが本来でなく、その口演を鑑賞すべきものなのである。上手下手、よし悪しも、口演と合せて、上演される度毎に評価される。面白かるべき「ネタ」も、未熟の者が演ずれば勿論、たとえ名人上手が口演しても、時々の事情によって、悪くなったりする性質のもので

ある。舌耕文学は散文的なものと述べたが、こんな処は演劇の詞章（脚本）に、むしろ似ているのである。

前述した、説教や神道講釈は「談じる」、講談は「読む」、落語は「話す」とは、それぞれの話芸の口演の方法の特色を示したことばである。

「談じる」は、別に「説く」とも称する。説法は法を説く意であるが、説法僧のことを又「談義僧」とも言い、これは義を談じるの意である。この種の舌耕は、神仏信仰の条理を説き、経典の義理を懇切に談じるもので、たとえ平明に述べたとしても、事は論理に渡るものである。

講談は「読む」ものと、その昔の「太平記読み」から定っていた。そして幕末までは実際に本を読んだもので、狂講で有名な志道軒が『徒然草』を机上に開いた浮世絵を初め、画証も揃っている。『本読素人講釈』なる、その読み方を説明した本さえある。無本の講談は、南鶴、南窓などを出した、田辺派に始まったといわれている。これは軍記の如き歴史的事実や、合戦の場などの記述を口頭で読み聞かすを立前とするからのことである。しかしそれだけではない。講談、講釈の「講」とは、読みながらも、わかり易いように説明する意義を持っている。ただし清田儋叟など、言葉遣いにむつかしい人は、

講釈講談ノチガヒハ猶談義ト説法トノ如シ、書生輩ヘ云聞ルニハ講釈モ宜シ、其外ハ皆講談タルベシ（『芸苑譜』）

と区別している、要するに学問の講義と違う、平易に説明するのが講談だというのである。新井白峨の『牛馬問』には、「通俗軍書を話して講釈といひ」ともあって、通俗的に読むのが講談なのである。通俗的にと心がけて読めば自然と余談が多くなる。『太平記評判秘伝理尽鈔』などの太平記読みの作った書物では、「評」とか「伝」とか称して、読む者の言葉をいたる処に挿入してある。「伝」とは事実の補説で、「評」とはそこの処の事件や人物

の言動についての批評である。これを挿入することで、聴衆の理解を助けたものである。この流れをうけた余談のことを、後々の講談では「引き事」と言っている。引き事を多くして平易にわかりやすくするのが「読む」である。今日でも、「今学期は源氏物語を読みます」など言って、講読を始める先生は、僧叟先生のいう講釈か講談かの学問的程度の区別はともかくとして、太平記読みの流にあると考えてよかろうか。

落語の「話す」も古いことである。戦国武将の御伽衆を「はなししゆ」（咄衆）（『大かうさまくんきのうち』『甲陽軍鑑』）と称したり、「咄の者」「咄の衆」などと呼んだのも、落し噺などを、よく話した意味ではあるまいか。『はなしの本』と古風に題した噺本の古版本もある。「話す」「はなし」は、常に相手を大いに意識した言葉である。談じる説法や読む講談は文章語がまじっているのが当然だが、話す落し噺は、口頭語、口語であるのが普通である。前二者は行儀よい姿勢を持するのが本来であるが、落し噺は表情やジェスチャーを加えても支障がない。否、それでこそ「はなし」である。といった程度の三者の相違は、舌耕文学を研究するにも基本として承知しておかねばならない。以上は基本についてのことであって、近世に入れば、この三者も、相互に他の特徴を採り入れた演じ方をするようになる。『紙子頭巾嘉久助咄』（文化四年）は、その頃の談義をうつして、

伊達騒動記や或は油井根元記などゝいふ軍書講釈、海老蔵まさりのこわいろに実悪女、それ〴〵の目つき仕かたをならひこみ、もし聾が参詣したらしつかい気ちがひばうずとよりほか目利のならぬ狂言は（下略）

など、談義に講談のような筋もあれば、落し噺の様な物真似仕ぐさもある様になったことを物語っている。

前出の『本読素人講釈』なる本にも、時代種の軍書を読む時は、出来るだけ引き事をしない方がよいと教える一方で、世話種の多い端物の場合については、

はものは、早くさきをよみおはるものゆへ、はなしをするやうに、しかたをおもにして、古燕凌ふうに、四方

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com